

「やる気応援奨学金」レポート

「挑戦」という名の一年経験 ILOでインターンシップを

法学部国際企業関係法学科三年 内山 幸子（私立学習院女子高等科）



バスに揺られること約二〇分。次第に巨大な建物と木々が見えてくる。「英語できちんとインタビュー出来るだろうか」、「リサーチは十分だろうか」。さまざまな不安と緊張感が胸が張り裂けそうになる。しかし、同時にそれらを越える「未知なる経験」への期待感が私の心中を支配していた。

これは私が昨夏、スイスの国際労働機関（ILO）本部に赴いた日の記憶である。私はこの日を一生、忘れることが出来そうにない。私の人生の中でも最大級の挑戦が幕を開けた日であった。

さかのぼれば私が国際インターンシップの門戸をたたいた理由は、「この目で見て、国際機関が国際問題に果たす役割を知りたい」と

いう点に尽きる。同時に子供の権利に興味があった私は、ILOでの児童労働に関する研究を切望していた。このような志望理由で国際インターンシップの受講を決めた私は、ようやくILOでの研修の入り口に立ったのである。しかし実際にインターンシップを行うまでの道のりは長く、険しいものだった。

インターンシップへの事前学修

「国際インターンシップ」という講義名を聞くと、インターンシップに向けた準備をしているだけの授業であるかのように思うかも知れない。しかしその内実はまるで異なる。教授・学生らとの討論や外部から招聘した専門家のお話

を通じて、国際問題を多角的に捉えられる力を養う場であると言える。同時に授業中は日英両語を用いるため「生きた英語」が身につく。春学期、私は能力の高い学友らと共に、国際問題と向き合う日々を送っていた。

もちろんインターンシップへの準備をまるで行っていなかったわけではない。私たちはバーフィールド教授の指導の下、毎週サブゼミを開講していた。ここで行ったことは主にILOに関する知識の強化、英語力の向上を目指すものである。

具体的にはまず、ILOについて知るところからスタートした。定期的に他の学生と調べてきたことを話し合ったり、簡単なプレゼン

テーションを行ったりすることで、自分の中に知識が根付いていくことを感じ取れたように思う。背景知識を備えた以後は、各々興味のある国際労働問題を決定し、いよいよインターンシップに向けた具体的な問題の研究を行うこととなった。ようやく私が児童労働の研究の入り口に立った瞬間である。

私の研究テーマは、前述した通り児童労働である。ILOにおいて児童労働は撲滅すべき課題として掲げられており、また実際にその活動が大きな成果をもたらしている分野でもあろう。ILOは強制労働、人身売買、児童ポルノなど、最も危険な児童労働をまとめて「最悪の形態の児童労働」と呼んでいるのだが、子供の人權に興味があった私はこれについて理解を深めようと試みた。児童労働のコアとなる部分に迫るためには、一つの事例を検証するだけでは無理がある。そこで私はインドネシ

アとマラウイにおける児童労働の調査を決定し、研究を開始したのである。

ILO インタビュのシッップの特徴

ところで、国際機関とはいったい何をしているのだろうか。恐らく多くの学生は答えられないように思う。私もそのような者の一人であった。まさに私たちが行ったインタビュのシッップは、そのような学生に向けて門戸を開くものだった。

たのである。

私たちが行ったインタビュのシッップは、一般的なインタビュのシッップとは少々趣が異なる。正式名称は International Work Experience Programme (I W E P) と呼ばれており、学生に対して広く国際機関で働くことに関する経験を積んでほしい、という趣旨で作られたプログラムであった。したがって、私たちは職員が実際に行っているような日々の業務に携わって

いたわけではない。前述した通り、各々が研究対象とする国際労働問題を決め、それについて職員の方々にインタビュをしたり資料を読み込んだりしつつ、最終日にプレゼンテーションとしてまとめるのが、その内実であった。

研究に関しては contact

Person と呼ばれる ILO 職員が各自を手助けし、同時にバーファイールド教授も学生らをサポートするという形式を採っていた。しかし、私たちのインタビュのシッップは決められたプログラムを淡々とこなしていたわけで

はない。インタビュのアポイントメントを取ったり、資料を選んで読み込んだりするの、すべて学生に任されている。インタビュも学生が直接、職員のオフィスに赴き、一対一かつ英語でせねばならない。すなわち、学生らの積極性・自主性に任されている部分も多かったと言えよう。ここが後々、私の ILO インタビュのシッップで大きな課題となってくるのである。

ILO で突き当たった「壁」

研究に終わりはない。同時に誰かが敷いたルールもない。テストのように覚えるべき事柄もなければ、「これさえやっておけば安心」という確証も存在しない。私たちが昨夏挑んだのは、このように今までやってきた学びとは一八〇度違う性質の「学び」であったのだ。つまり、自分自身で自分の研究に対する答えを導き出さねばならないのである。

この点、私は非常に苦勞した。ILO インタビュのシッップで何に苦しんだかと問われれば、一に研究二にインタビュといったところであろう。

もちろん研究自体は、私にとつて大変興味深いものだった。今まで知らなかった事柄を知っていくのは、純粹に知的好奇心が満たされる。決められた内容を受け取るだけの学びでないのも面白い。しかし研究とは、ただ物事を知ることではない。知った上で自分の考えをまとめ、「ILO インタビュのシッップの成果」として提示せねばならないのである。

振り返ってみれば、私は完全にその部分が欠落していたように思う。そのため ILO 到着後に突然、私は何をやっていいのか分からなくなってしまった。きっかけとなったのはある ILO 職員へのインタビュである。私は児童労働と教育の関連性をまとめようとしていたのだが、彼女はあっさりその方向性を否定した。「ILO は国際労働機関であり、教育との関連性は特に扱っていません。その言葉を聞いて目の前が真っ暗になった瞬間は忘れられない。

それ以後、研究の方向性を求める私の迷走が始まる。今までやってきた研究は無駄だったのか。一から資料を探していたらプレゼンテーションに間に合わない。幾つ



ILO 国際労働基準局長 (中央) と共に

もの不安が浮かんで消えていった。「また研究を否定されたらどうしよう」と、インタビューをすることさえ、ためらうようになった。誰にも相談することが出来ず、目の前にある資料をただ読むだけの日々を二日ほど送った。

そのような時、力になってくれたのが contact person のリマであった。彼女は私が何を研究したいのか、どのような思いで研究してきたのかを真剣に聞いてくれ、その上でプレゼンテーションの方向性を提案してくれたのである。そ



国連ジュネーブ事務局にて

の際に感じた、眼前の道が開けたかのような感動は忘れられない。同時に彼女は、私の研究内容について詳しい職員まで紹介してくれた。その後、何人かの職員にインタビューさせてもらったのだが、その度に気付かされたのがILO職員の学生への寛容さである。あの職員の方はインタビュー中、その場で同僚に電話を掛けて新たなインタビューの約束を取り付けてくれた。彼らは自分の業務を後回しにして、私たちに時間を割いてくれているのである。振り返ってみてもILO職員の方々に対する感謝は尽きない。

そして最終日、ついに研究成果を発表する日がやってきた。少々言葉に詰まる部分もあったものの、プレゼンテーションでは無事、グローバル・アクターとローカル・アクターの提携という児童労働撲滅のための独自の視点を提示することが出来た。振り返ってみるとプレゼンテーションをしている間、誇張ではなく私の心は楽しさに満ちあふれていたように思う。自分の行ってきたことを話し、聴衆との議論を巻き起こす。アカデミックな学修の醍醐味を感じた瞬間であ

あった。

ILOで何を得、今後何をすべきか

こうして私のILOにおける挑戦幕を閉じたわけである。このインターンシップで得た最大の成果を考えてみれば、「国際社会に生きる」ということを実感したことではなからうか。

ジュネーブは小さな街でありながら、トップレベルでの国際社会の中核である。そこにはさまざまな国籍の人々が暮らし、国際社会をより良くしようとする奮闘で満ち満ちていた。日本人として、小さなスコープから世界をのぞいていただけでは分らないことがたくさんあったように思う。世界的情勢を把握して、その中にいる一人の人間として生きる。ジュネーブで出会った人々は皆、そのような考えで生活していた。国境の壁が薄らぐ現在において、「世界の中の自分」という視点を持たねば、私たちはもう社会をリアルに捉えることが出来ない。実際、昨夏のインターンシップを経て、私の社会問題の捉え方は大きく変化した。常に頭の片隅に「問題を国際的に捉える」という視点が備わったよ

うに思う。国際人として生きるとはどういうことなのだろうか。それが学生のうちに分かったというだけでも、非常に価値あるインターンシップであったと思う。

しかし私のインターンシップは終わったとは言え、児童労働には今だに終わりが見えない。今も世界のどこかに教育も受けられず、生活のために働く子供たちがいる。私たちはそれを絶対に忘れてはならない。児童労働は児童本人への悪影響にとどまらず、社会全体に波及する問題である。私はILOで児童労働を研究した者として、それを伝える責任があるだろう。今後とも何らかの形で児童労働撲滅活動にかかわっていければと考えている。

ILOインターンシップを終えて、はや半年以上がたった。今でも目を閉じれば、ジュネーブの美しい街並みと研究に奮闘した日々が脳裏に浮かぶ。そこで得たものは数知れないが、それをどう生かしていくのかがこれからの課題であろう。ジュネーブで得た国際人としての視点を忘れることなく、今後とも国際社会の一員であることを胸に刻んで生きていきたい。